

電撃文庫の大人気作品
『エロマンガ先生』の
書き下ろし短編小説

今回のヒロインは
「たかさご書店」の看板娘、
高砂智恵!!

原作コンビとコミカライズ作者
がコラボレーション!

伏見つかさ

扉イラスト ◆ かんざきひろ
挿絵イラスト ◆ rin

3号連続掲載第2弾!

智恵編

エロマンガ大王



EROMANGA-SENSEI

高砂智恵は、俺・和泉マサムネの同級生で、駅前にある本屋さん「たかさご書店」の看板娘である。

趣味は読書とスニーカー集め。漫画とライトノベルを愛する女子高生だ。

ライトノベル作家、兼、高校生である俺とは、とても話が合うのだった。

いつさい染めていない艶やかな黒髪、穏やかなような眼差し、豊かな胸元。

とまあ、一見のんびりとした優等生、といった外見なのだが……実のところはそうでもない。

そうだな、例えばこの前、こんなことがあった――。

六月中旬。クラスでの話題に「夏休み」という単語が混じり始めた、ある日の放課後。

席に座って帰宅準備をしていた俺は、近寄ってきた智恵に声をかけられた。

「ムネくん、ちょおーっと、いいかなって？」

智恵は、腰を折り曲げ、こちらにぐっと顔を近づけて、妙にニコニコしている。

俺の眼前に胸がくる、たいそうあざといポーズであった。

「……めっちゃイヤな予感がするんだが……なに？」

「ボクに、勉強を教えて欲しいんだっ！」

うるんだ瞳で、じつ……と俺を見つめてくる。しばし見つめ合ったあと、俺は片手を振ってこう言った。

「……ゴメン、いま新作の執筆で忙し、」

ぱんっ！ 智恵は、手を合わせて俺を拝む。

「無理を承知の上でお願いしたく！ どおーか、学年十五位の和泉正宗サマ！ 追試をクリアしないと、補習で！ 夏休みが！」

なるほど、そういう理由ね。

「……事情はわかっただけど」

「むろん、タダとは言いませんぬ！ 報酬として、今月の『電撃大王』を用意いたしております！」

おお……智恵にしては、奮発したな。

たぶん自分用に買ったやつなのだろうが、この本屋の娘は、通常、みだりに本をあげたり貸したりしない。自分で買い物をしてもらわな

くちやいけないからね。

そのポリシーを曲げてまでの「お願い」ということらしかった。

智恵の熱意を受け取った俺は、こう返事をした。

「でもさあ……『よつばと！』載ってないんでしょ？」

「載ってないけども！ 他にも面白い漫画がいっぱい載ってるから！ 最近連載が始まったばかりの作品もあるし、新規で購読を始めるにはうってつけの号だから！――あつ、面白かったら、来月からは自分で買ってよね」

「それってもう、報酬というより、販促じゃないの？」

「くっ……これで足りないというのなら……！」

智恵は、ぎゅっと両目をきつくつむって、何故か赤面した。

「もうっ……ボクのカラダで払うしか……っ」

「教室でなに言ってるの!？」

悲壮な雰囲気を出すんじゃない！ 女子グループから、スゲー目で見られてるんだけど!？」

「……だ、だって、ムネくんは、エロマンガ先生に、ぱんつを見せてくれる美少女を探してるんでしょ？」

そこでボクが、エロマンガ先生の犠牲になってあげる代わりに、勉強をだねっ」

「その件はもう解決したからいいよ」

解決したというか、捕まってみただけというか、説明する気にもならないんだけども。

ともかく、それはまた別の話だ。

ちなみに、エロマンガ先生というのは、俺の小説の挿絵を描いてくれているイラストレーターで、別にえつちな漫画でもなんでもない。

……えつちなやつではあるけれども。

断じて、えつちな漫画を描いている先生のことではないのである。

しかし、聞き耳を立てているであろうクラスメイトたちには、俺が智恵に、勉強を教えるあげる代わりに、えつちな要求をしているようにしか聞こえんだろうな。

「くっ……これ以上ここで会話を続けるのはマズい」

俺は、慌てて立ち上がった。「智恵、図書室に行こうぜ。追試の対策だけ、ぱっと教えるからさ」

「お、商談成立、ということかな？」

「いや、タダでいいよ。いつも面白い本を教えてもらってるし、そのお返しで」

「ほんとにっ？ うわ、すっごく助かるっ」

智恵は、ほっと安心したように息を吐き、微笑んだ。

彼女に好意を持つやつなら、それだけで報酬になってしまうような笑顔だった。

俺は少々照れくさくなって、頬をかき。

「あ、そうだ。恩に着てくれるんなら、俺の新刊が出たとき、オススメ棚に並べてくれない？」

「いいよ。ただし！ ボクが読んで、面白かったらねっ！」

残念ながら、そこは、書店員として曲げられないところらしかった。

俺たちは図書室に移動して、長机を挟んで、向かい合うように座った。

長机の上には、ノートが広げられている。しばらく追試範囲の内容を教えていると、智恵がノートから顔を上げ、言った。

「いやあ、ムネくん、改めてありがとうね。優しい友達がいっぱい幸運に、感謝だっ」

「お礼は、追試結果で返してくれ」

「そのつもりだよ。にしても、試験結果の順位表を見て、びっくりした。キミって、あんなに成績よかったんだね。オシゴト、だって忙しいんだらうに、勉強する時間とかあるの？」

「毎回必死だよ。ちょっととした事情があつてさ、」

登場人物紹介

和泉正宗
Masamune Izumi

高校に通いながら小説家の仕事をしている。ペンネームは和泉マサムネ。自分の作品やペンネーム、WEB検索できないタイプ。引きこもりの妹がいる。

イラスト：かんざきひろ

和泉紗霧
(エロマンガ先生)
Sagiri Izumi

正宗の、血のつながらない妹。重度の引きこもりで、他人が家の中にいると、部屋から出られないが、実はエロマンガ先生というペンネームでイラストレーターをしている。えつちな絵を描くのが好き。

高砂智恵
Tomoe Takasago

正宗の同級生で「たかさご書店」の看板娘。正宗の職業を知る、数少ない異性の友人。趣味は読書とスニーカー集め。

成績落とせないんだ

いま、ここでは関係のない話なのだが、俺とはある理由によって、常に勉強と仕事を両立させている必要があるのだった。

「おまえこそ、見た目優等生っぽいのに……」

意外とアホなんだな。

「ん？ なにかな？ 最後まで言ってるらん？」

あえて言わなかった台詞を察したのか、智恵が怖い声で言う。

俺は、あわててフォローを入れる。

「い、いや、まあ……智恵にだって、すごいところはあるよ」

「ほおう……？ たとえば？」

疑わしげに目を細める智恵。

こりゃ、いい加減なことは言えないな。

ええ……智恵のすごいところ……すごいところ……

「面白い本とか、ゲームとか、アニメとか、たくさん知ってるし。本屋の陳列テクニクとか、次に流行る本の分析とか、ほら、えつと、以前の『富士見ファンタジア文庫』みたいに巻数表示のされていないラノベを、ちゃんと刊行順に並べることができるスキルとかさ、地味にすごいと思う！」

以前、山田エルフ先生がこのスキルのことを、中二くさく、超整理術、なんて呼んでいたが。『そういうのって、普通の女子高生には、できないことだと思っせ』

熱いフォローを試してみたのだが、智恵は、憂

EROMANGA-SENSEI

いを帯びた顔で言った。

「……学校では、評価されない項目ですからね」

「普通科高校の劣等生、なんだな」

「それってただのバカってことだよな！」

「がぁー、と席から立って声を荒げる智恵。」

「図書室で大声出すなよ……ほら、周りから睨まれてんぞ」

「あつ……いけない、いけない」

智恵は両手で口を押さえ、申し訳なさそうに座る。

「さ、気を取り直して。勉強の続きをしようぜ」

高架を通過する電車の音が、がたごとと響く。夕方まで勉強を続けた俺たちは、一緒に帰り道を歩いていた。線路沿いの細い道……ちょうど梅島駅と五反野駅の間あたりだ。

「そういえばさあ、ムネくん」

いつものように、なんでもない雑談を交わしているとき、智恵がこう切り出してきた。

「ラノベ作家って、もうかるの？」

「……………」

あまりにも下世話な話題に、俺は、非難がましい眼差しを、異性の友人へと向ける。

「いや、だって！ やっぱ、気になるじゃんか！」

ホラ、一オタク、一ラノベファンとしてね？」

いるよなー、こういう、うざい質問してくる友達。

マジで余計なお世話っつーか、そんな知らなくたっていいじゃねーかよ。

社会人なら、どんな職業の人も経験する、あるあるネタかもしれないが。

「で？ どうなのさっ？」

「……人それぞれじゃないか？ それこそ例の」

「山田エルフ先生」とかなら、家を買えるくらい稼いでいるだろうし」

俺は、無難に答えたのだが、

「和泉マサムネ先生は、たいしたことないの？」

失礼すぎだろこいつ！

「……ど、どうかな。ぜんぜん本が出せなくて、一昨年もあれば、日本人の平均年収以上に稼げた年もあるよ。……まあ、やっぱ、色々と言えないかな」

「ふうん。よくネットとかで、『ラノベ作家は稼げないから、編集者さんから、『絶対仕事やめるな』って言われる』なんて話を聞くけど」

「それは嘘だな。ソースは俺」

俺は、自信を持って回答した。

「俺の前作、『転生の銀狼』の売上が、ちょっと持ち直したとき、俺の担当編集の神楽坂さんから電話がかかってきて——」

「和泉先生って、学生でしたよね？」

「はい、そうですけど」

「新作、いま売り上げ持ち直して、けっこう売れてるっぽいんで、やめませんか？」

「は？」

「学校なんかやめて、専業作家になっちゃいま」

しようよ！」

「ま、またまたご冗談を」

「えっ？」

「えっ？」

「えっ？」

「……えっ？ ま、マジすか？」

「……ってなことがあった」

「ネットゲの廃人ギルドみたいだね」

「まあ、もちろんやめなかつたからこそ、いまこうして二人で帰ってるだけだよ。あと、一応フォローしておくけど、作家の将来を気遣ってくれる心優しい編集者さんも、もしかしたら、この世のどこかには、いるかもしれない」

「……明らかに『いるわけねえ』というニュアンスが感じられるんですけど？」

「気のせいだ。……で、智恵、この話にオチはあるの？」

「えーつとね……あるっちゃあるかな」

「あるのかよ」

意外だ。

智恵は「んーとね」と、あごを上向けて、言葉をさまよわせる。

「もしもムネくんが、アニメ化するくらいの大ヒット作品を生み出して、山田エルフ先生くらいに大儲けしたらさあ——」

「大儲けしたら？」

智恵は、頬を赤らめ、ちらっと視線をこちらに寄せ、

「……ボクが、ムネくんのお嫁さんになってあげても……いいよ？」

「金目当てを隠そうとしてもねえ！」

ふざけんな！ せめてもうちょっとカムフラージュしろよ！

もちろん冗談だったのだろう——智恵は、怒る俺を見て「あはははは」と、大笑いしていた。

「ぶぶ……ま、考えておいてよ」

「却下。俺、好きなひといるし」

「！ ……へ、へえ——誰？ 誰？ 同じクラス？」

「秘密」

俺は、パイッとそっぽを向く。智恵は俺の肩に腕を回し、興味しんしんに絡んでくる。

「えー、教えろよー、ボクとムネくんの仲だろー？」

「俺とおまえの仲ってなんだよ。金目当てで、プロポーズをする程度の仲なんだろ？」

「いやいや、愛はともかく、ボクたちの間には、無償の友情があったはずだぜ？」

……………

「……なにさ、ムネくん。その何か言いたそうな顔は？」

「俺って、なんでおまえと友達になったんだっけ？」

「ちょ、ひどーい！ 忘れちゃったの？」

智恵は立ち止まり、俺に顔を近づけて声を荒らげる。

「初めて話したきっかけ」は覚えてるんだけど

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

EROMANGA-SENSEI

「よし！ 買えッ！ 買うんだ！ お願い
します！ きつと面白いから！」

「……………なんだよこのエロマンガって……恥
ずかしくて買えねーよ」

「ほいつ。無情にも、売り場に戻される俺のデ
ビュー作。」

「ぐっ、ちくしょおおおおお！ エロ
マンガじゃないのに……！ えっちな内容じゃ
ぜんぜんないのに……ッ！」

本棚の陰で一部始終を見届けた俺は、歯をギ
リギリと喰いしばって悔しがった。

「ハア……ハア……」
さらに見守ること数分。再び、俺のデビュー
作を手取る人がいた。

「よおッ！ 今度こそ！ 買ってくださ
い！ エロマンガって書いてあるけど、えろく
ないから！ さあ！ 勇気を出して！」

「……………新人作家か……人柱待ちだな」
ほいつ。無情にも、売り場に戻される俺のデ
ビュー作。

「ぐっ、エラそうに……ッ！ 何様
だてめえ！」

俺は、本棚の陰から、呪い殺さんばかりに睨
みつけてやる。

モンスターペアレンツと呼ばれる親たちの気
持だが、いまの俺には、実によくわかる。

「ハア……ハア……」
さらに数分見守るも、一向に俺の本を買って
くれる人は現れない。

「く……っ」

「や、やばい……。このまま一冊も売れなかつ
たらどうしよう……。」

デビュー早々、一巻打ち切りになっちゃった
ら、どうしよう……。」

そんな情けなくも切実な想いから、つい、魔
が差してしまったのだ。

俺は、ふらふらとライトノベルコーナーに近
づいていくや、おもむろに自著を手を持ち、周
囲に聞こえるよう一言。

「おっ！ なんか超面白そうなの売って
るぞお？」

顧みてみれば、わざとらしいにも程がある台
詞であった。

「イラストもかわいいし、和泉マサムネってペ
ンネームもかっこいいし、あらすじも楽しそう
だし——こりゃ、大ヒット間違いなしですわ！」

「……………勇気を出して、買っちゃおうかな？」
チラチラッ。

「……………さあ、皆の者！ 買えッ！ 買うのだ！
作者である和泉マサムネ先生みずから、ライ
トノベルコーナーにいるお客さんたちに、熱い
念を送ってやる。」

そんなことを、調子こいて、数分間にもわたっ
て続けていたときだ——

張ってきたんだが……」

「んっ、ありゃ？ 和泉くんじゃない？ 一組
の」

「えっ？」

振り返ると、声の主は、俺と同じ年（中一）
くらいの女の子だった。

黒髪ロングの、おとなしそうな顔立ち。飄々
とした口調は、見た目と少しギャップがある。
黒い三本ラインの入った、アディダスのス
ニーカーをはいていた。

「君は……」
「高砂智恵。覚えてないかなあ、小三のとき、
同じクラスだったんだけど」

「……………ごめん」
「そか。ま、いや」

「……………小僧、こんな美少女を忘れたってのか？」
ドスの聞いた声で凄んでくるザンギ、もとい
店主。

俺は震えあがって「す、すみません」と謝る。
すると高砂さん——娘さんの方だ——は、
かあ、と顔を赤らめて、

「ちよ、おとーさん！ 恥ずかしいこと言わな
いでっ！ えっと——で、どゆこと？」

「だからな。この店で騒いでた小僧が、『自分
がこの本を書いた作家』だとか何とか、下手
な嘘を吐いてよう」

答えたのは、俺ではなく、店主だ。彼は、毛
むくじらの手で、机の上に置かれていた、俺
のデビュー作を取り、娘に表紙を見せる。

「あそれ。今日発売の新刊じゃ——つて、え？」

「どうやら、著者名に『和泉マサムネ』とある
のを見つけたらしい。」

「和泉マサムネ……？ 和泉正宗……？ ん？
んんん？ ま、まさかっ！」

はっ、と、俺を見る高砂さんに、俺は言った。
「うん……俺が、その本の作者——『和泉マサ
ムネ』なんだ」

「……………マジで？」
「……………マジで？」

「……………偶然じゃねえのか？」
店主は、依然として、胡散臭そうな眼差しで
俺を見てくる。

「ほ、本当ですって」
デビュー当日に、自分がラノベ作家だと正体
をバラす羽目になるとは思わなかったが、他に、
あの奇行を説明できる理由が思いつかない。

「……………と、そう主張したわけだが。」
「……………どうも、店主のおっさんには信じてもらえて
いないらしい。」

一方、娘の高砂さんの方はどうかというと、
なにやら腕を組んで考え込んでいた。

「うーん、うむむむ……………ねえ、和泉くんさあ」
「な、なんだ？」

「『ブラックロッド』と『ブラッドジャケット』
と『ライトライツ・ホーリーランド』。この
三作ではどれが一番好き？」
どれも電撃文庫から発売されている超名作小

ぼん、と俺の肩に、背後から手が置かれた。
「はい？」

「きよとん、と、俺が振り返ると、そこには、
……………お客様、ちよっと、お話が」

筋肉ムキムキで下迫力の、ザ●ギエフみたい
なおっさんが、かわいいエプロン着用で、立っ
ていたのである。

店内で騒いでいた俺は、ハゲ髭マッチョな店
主によって、書店のバックルームに連れていか
れた。

「ばんっ、と、机を叩き、何度目かの弁明を繰
り返す。」

「ですから！ 俺が作者なんですよ！ この本
の！」

「……………こんなに若い作家がいるか。うちの娘と
同じくらいじゃねえか」

「本当ですって！ 最近中学生デビューとか、
珍しくない時代なんですってば！ えっと——
ほら、これ、学生証！ 和泉正宗って書いてあ
るでしょ！ この本の作者と、ほとんど同じ名
前ですよ！ これが証拠です！」

「むう……………いや、しかしなあ」
と、そのとき、俺の背後から女の子の声が聞
こえてきた。

「ちよっとお、おとーさん、お店空っぽにして
なにやってんの？ 万引きかなにか？」

「いや、店で騒いでるやつがいたからよ。他の
お客様の邪魔になるかもしれねえから、引ッ

説だ。

俺は、質問の意図をはかりかねながらも、即
答していた。

「『ブラッドジャケット』」
「ふーん」

高砂さんは、納得したように首肯する。
「……………と、指を一本立てて、
『ラノベキャラで、キミが一番かっこいいと思
う名前は？』」

「……………霧間風」
「……………ほうほう。んじゃあ、『ギーポップ』シリ
ーズで、一番好きな本は？」

「……………高砂さん……………この質問に、なんの意味がある
わけ？」

「……………ライトノベル性格分析』ってところかな。い
から答えてよ」

「……………VSイマジ——いや俺は、ちよっと考えて、
『エンブリオ炎生』、かなあ」

「……………そっか、そっか、なるほどねえ——どーり
で。ちなみにボクは、『パンドラ』と『ペーミン
トの魔術師』が好きだよ」

「……………あ、俺も『パンドラ』は、超好き」
「……………お、わかっているねっ。ところで、うちのおと
ーさん、ちよっと『イナズマ』に似てない？」

「……………え、ええ？ に、似てないと思うけど！」
「……………どう見てもザ●ギエフだつてば。」
「……………おいおい、なんの話だ？ さっぱりわからん
ぞ」
置いてけぼりにされたザンギ、じゃなくて店